



成田ロータリークラブ

ロータリー：
変化をもたらす

週報



国際ロータリー2017～18年度会長 イアンH. S. ライズリー

第2765回例会 平成29年9月22日(金)

- ◇ 点 鐘 成田 温 会長
- ◇ ロータリーソング それでこそロータリー
- ◇ 四つのテスト 齊藤 三智夫 会員
- ◇ お客様紹介 池袋西ロータリー クラブ
平井 憲太郎 様

- ◇ ニコニコボックス



高根 完 会員： 私、一身上の都合

で、本年3月に体調を崩しまして半年ほど例会に出席できず、この場でお詫びを申し上げます。申し訳ございませんでした。療養中、吉田会員からお花をいただいたり、お気遣いをいただいで感謝しております。ありがとうございます。病気に関しましては、千葉大学附属病院で受診をしております。原因不明で検査をしております。なかなか毎週例会に参加することは難しいですが、今後出来る限り例会に参加して、皆さまとの交流を深めつつ、ロータリーの奉仕の心をもって、自分の本来の生業である、6月から理事になりました社会福祉法人を責任をもってつとめていきたいと思っております。休職中に関しましては、週報で皆様のご活躍を見たり、新しく入った会員様の経歴を見たり、自分が体調管理できずに来れず、迷惑をかけたことを猛省しておりました。今日司会のローソン様と同じ月に入会しましたけれども、半年間居なかったもので、ローソン様もたくましくなられて自分もおいて行かれたなと思っております。またこれから仕切りなおす気持ちで参加させていただきますので、よろしくお願いたします。



角田 幸弘 会員： 今日、卓話の方で平井憲太郎会員をお招きしまして私も嬉しい限りです。成田スカイアクセスですと池袋から成田までたった37分で来られますので、羽田より近いですよね？成田は意外と近いということです。昨日、このあいだお話した桂三木助さんの真打昇進襲名披露興行の初日の公演がありまして、上野の鈴木演芸場へ行ってきました。

そこに緞帳があるんですけども、緞帳には長野の富貴がありました。緞帳が開きましたら成田の長命泉の樽が輝いており、たいそう嬉しく感じました。

それから、本日の産経新聞に私の鉄道が紹介されましたので後で回覧させていただきます。



諸岡 靖彦 会員： 去る19日は恒例の表千家成田山献茶式が行われました。表千家同門会千葉県支部長として参列しました。本年は、来春いよいよ家元を継承する千宗員若宗匠のご奉仕によるお献茶が、御本尊不動明王に捧げられました。また、昨日9月21日は「空の日」で、これも恒例の航空安全祈願祭が成田山大本堂で奉修され、成田空港会社夏目社長、実行委員長の長田副社長を筆頭に、エアライン、交通、ホテル、旅行代理店、地元経済団体の幹部が参列いたしました。私は池内成田商工会議所会頭の代理で参加しました。当クラブ会員も多数御見受けいたしました。空港と街の発展のためには空港機能の安定運用と、何よりも航空機と空港の安全で安心な運営が最優先されることを改めて強く感じたところです。



松田 泰長 会員： 久々のニコニコです。2つあります。一つめは、2年前にガンの宣告を受け手術をしてから丸二年が過ぎました。先週、定期検診を受けてきまして、特に異状なし、アルコールも飲んで良しとの結果をもらいました。私の原動力のアルコールです。ガス欠にならないように補給していきたいと思えます。二つめです。今日卓話をいただきます平井さん。

前回お越し頂いた例会のときに「平井憲太郎さん」というお名前に何処かでモヤモヤするものがありました。帰りの車の中で気がつきました。今日わたしの付けているバッジ「J R I C」1999年に結成されたロータリアンの任意団体で、「日本、ロータリー、インターネット、クラブ」というものです。わたしは入会半年でこのクラブに入り16年になりますが、平井さんは発足時からのメンバーで、ネット上では16年のお仲間です。今日、平井さんとは初めて顔を合わせてお話をさせてもらいましたが、改めてロータリーって素晴らしいな、と感じました。ありがとうございました。

神崎 誠 会員： 私の住んでいる久米野地区に十数年前から子供神輿があるのですが、9月19日（火）、当成田ビューホテルさんに置かせてもらえないかとお話をしまして、正式に決定しました。ロビー下階の事務局の入り口のところに永久展示予定ですので、ご覧いただければと思います。



長原 正夫 会員： 先ほど諸岡会員から成田山の献茶式のお話が出ましたのでニコニコさせていただきます。諸岡むつみ様より成田山献茶式の茶券を2枚ほど頂き、お茶をやっている家内と義姉が出席しまして大変貴重な経験をさせていただき感謝しておりました。私ではないのですが、代わりにニコニコさせていただきます。

◇ 会長挨拶

成田 温 会長

皆様こんばんは。今日は初めての通常夜間例会でございます。お酒が飲めない会長特権で今晚はお酒抜きで通常例会でございます。何人かの会員からは「この時間で酒抜きなの？」と問われましたがお酒は在りません。これから通常昼間やっている例会をそのまま実行いたします。したがって、例会終了時間は19:30となります。半端な時間で申し訳ありませんが、一度トライしてみましよう。かなり前にはなりますが、ある年のホームミーティングで通常の夜間の例会があっても良いのでは、との意見が出ました。昼間の例会の出席に苦勞している会員には良いのではないかと、また昼間だから来られるが夜だと少々難しくなる会員もいるのではないかと色々意見が出ましたが、その場ではそれだけの話で終わりました。長原幹事とも相談して一度やってみなくては分からないので実行してみようということになり、本日の例会となりました。



また、今日の卓話は角田クラブ管理運営委員長の友人で、先日メーキャップでお出でになられました池袋西ロータリークラブの平井憲太郎さんでございます。先日の話では角田さんの趣味である鉄道関係の先輩であるとのご紹介がメインでしたが、その後、角田さんより平井さんに卓話をお願いしたい、それも平井さんは江戸川乱歩氏のお孫さんであるので江戸川乱歩の話をしてもらうとの事でした。皆さんも一度はお読みになった事があるのではないかと思います。私も昔少年の頃に読みました。少し当時としてはエロチックなところもあり夢中になって読んだ覚えがあります。今日は「乱歩夜話」ということで今日のような夜間例会での卓話にピッタリです。それでは皆さん、卓話の時間を楽しみにして例会を始めて参ります。会長挨拶を終わります。

◇ 表彰

ロータリー財団

- ・マルチプルポールハリスフェロー4回目
小寺 真澄 会員
- ・マルチプルポールハリスフェロー6回目
成田 温 会員



◇ 委員会報告

・諸岡ガバナー年度準備室会議委員会

堀口 路加 会員



諸岡ガバナー年度の地区幹事長予定者の堀口です。2019-20年の諸岡ガバナー年度に向け、3月から先月まで6回にわたりガバナー年度の体制についての検討委員会を石川会長年度から成田会長年度、そして神崎会長エレクト、深堀ノミニーと各年度の会長、会長予定者、幹事で開催してまいりました。この検討委員会の経過と結果を踏まえて第1回の準備室会議をおこないました。

会議の中では、諸岡ガバナー年度に向けたクラブ内の準備組織、次年度の地区委員会出向者の検討、地区組織編成の考え方などについていろいろとご意見をいただきながら検討いたしました。改めて会員の皆さんにはお知らせいたしますけれども、こうし

◇ 幹事報告

長原 正夫 幹事

【回覧】

- ・例会変更 多古、木更津東ロータリークラブ
- ・週報 成田コスモポリタンロータリークラブ
- ・印西ロータリークラブ 事務所移転のお知らせ
- ・年次基金寄付「地区寄付レポート」
- ・2017-18年度 奉仕プロジェクト委員会セミナー報告書
- ・第6回成田スポーツフェスティバルの開催についてのご案内
- ・ハイライトよねやま Vol.210
- ・九州北部豪雨災害に対する義援金の御礼とご報告
- ・国際ロータリー第2790地区 野球リーグ マリン大会のご案内
- ・ガバナーノミニー・デジグネートの公表について

【連絡】

- ・ロータリー米山記念奨学事業 2017-18年度版 豆辞典が届いています。
- ・東京中央新ロータリークラブより特別例会のご案内
10月16日（月）帝国ホテルにて石破茂衆議院議員による講演があります。
出欠の締切は9月30日。参加希望の方は事務局までお願いします。
- ・親睦旅行参加者には、本日行程表等お渡ししております。来週の例会にて旅行会社JTBの添乗員さんのご紹介がありますので、来週ご案内します。





卓話 「乱歩夜話」

平井 憲太郎 様

■略歴

1950年東京都豊島区生まれ。

幼時から鉄道、鉄道模型を趣味とし、立教高校在学中の「鉄道ジャーナル」誌の編集アルバイトをきっかけに鉄道趣味書出版の世界に入り、1968年友人と共に写真集「煙」を出版。立教大学卒業後、1974年に株式会社エリエイより鉄道模型月刊誌「とれいん」を発刊、現在に至る。

■役職

株式会社エリエイ 代表取締役

NPO 法人日本鉄道模型の会 理事長（鉄道模型の業者とユーザーをつないで様々な行事を行う団体）

NPO 法人としまユネスコ協会 代表理事（豊島区をベースに民間ユネスコ運動を行う団体）

東京都ユネスコ連絡協議会 会長

一般社団法人豊島区観光協会 副会長・常任理事

公益財団法人としま未来文化財団 評議員



角田さんから丁寧なご紹介をいただきましてありがとうございました。前回例会にお邪魔した際、ニコニコでも少しお話をさせていただきましたが、角田さんとは高校生の頃からお付き合いをさせていただいております。それ以来40年以上、最近はそのゆめ牧場でも遊ばせていただいております。

ご紹介にありましており、私は推理小説を書いております江戸川乱歩の孫に当たります。父は一人っ子でしたので、孫は私と妹の2人しかおりません。妹は私より6歳下になりますので、あまり祖父のことを覚えていないようです。祖父が亡くなりましたのは、私が15歳の時でした。私は初孫ということもあって小学校の低学年くらいまではずいぶんと可愛がってもらった記憶があります。私の全然知らない時代のこと、こちらは人からの伝い聞きの話ですとか記録に残っているものを鵜呑みにしてしゃべっているところもございますので、どこまでが本当かわかりませんが、お耳汚しと思っておりますがおつきあいいただければと思います。

祖父は1894年（明治27年）に三重県名張町にて生まれました。乱歩の父 繁男は三重県津の藤堂藩家臣の家系でありました。曾祖父は関西法律学校（今の関西大学）を卒業（第1回生らしい）。法律書を著し、弁理士の資格も取りましたが、お武家様は生きていけない時代でしたので、その道へは進まず、三重県の役人となり、たまたま赴任先が名張町であったということです。ですから、名張市は非常に乱歩の事を取りあげてくださっていただき、町おこしの種にも使っていただいているんですけれども、実は8カ月しか住んでお

りません。本人は全く覚えていないはずです。

このあと転勤で亀山に移りまして、1897年（明治30年）、祖父が3歳か4歳の時には名古屋に移っており、中学を出るまで名古屋におりましたので、基本的には名古屋人ととらえていただければよろしいかと思えます。

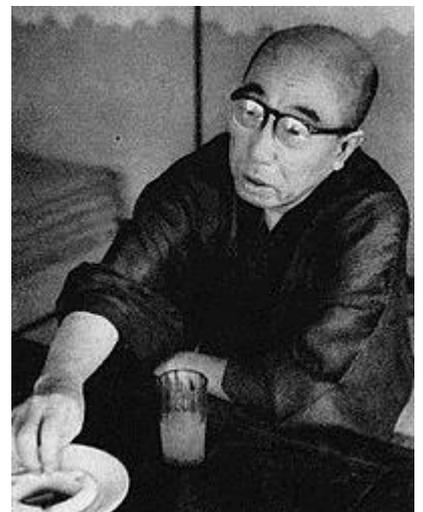
わが家のお雑煮ですが、私の母は茨城県土浦市で生まれ、父は大阪府守口市、祖父は名古屋でしたので、基本のお雑煮は八丁味噌を使った真っ黒のお雑煮でした。母はそれが食べられなかったようで、白味噌と黒味噌と両方作って、2つお雑煮があったことを覚えています。

もともとお役人だったのですが、名古屋に移った理由は曾祖父が事業を始めたからです。貿易商のようなことをやっていたようで、1908～12年は事業が好調で豊かな暮らしをしていたようですが、1912年、祖父が中学校を出る寸前に家業が破綻してしまいまして、八高進学を断念し、親戚の縁などを頼って早稲田大学予科（今の早大学院）に入ることになり、苦学を覚悟して上京しました。

そのまま早稲田大学政経学部へ進み、めでたく卒業しまして、大阪の商社に就職したのですが、どうも性に合わなかったようで、1年も経たずに辞めてしまいました。辞めたのか首になったのかその辺は詳らかではないのですが、どうもまずいことがあったと本人が書いていますので、何かやらかしたのかもかもしれません。もともと小説を書きたい人だったようで、朝出勤して机に向かって夜帰ってくるという生活が肌に合わなかったのかもかもしれません。そのあと23～24歳でフリーターになってしまいました。

フリーターとは直接関係ないのかもしれませんが、転居マニアということで曾祖父の転勤で移った数回も含めて、今残っている池袋の家に来るまでに46回転居しています。ここに来たのが四十何歳かですので1年に1回以上引越しをしている計算になります。これについては後ほど裏話もあるのですが、名古屋、大阪、東京を行ったり来たりしていたようで、本当に引越しマニアとしか言いようがありません。

祖父はおばあちゃん子だったようで、祖父の母と祖父の祖母と一緒に居りまして、その祖母にずいぶん本を読んでもらっていたようです。本も去ることながら、新聞の連載小説というのが明治時代は流行っておりました。それが新聞の一番の売りどころであった時代でもあるんですけども、そのころの小説というのは、今の日本の小説ももちろん文学として発達はしていたんですが、タネが少ない、面白いものが少ないということで、翻案という、海外の小説を日本の登場人物に置き換えたものが非常に流行っていました。黒岩涙香（くろいわるいこう）という名前をお聞き及びの方もいらっしゃるかもしれませんが、この方は「万朝報（よろずちようほう）」という新聞の出版主、社主の方なんですが、翻案の大プロフェッショナルでありまして、いろんな小説を翻案して、タイトルや人物を日本に置き換えて新聞に掲載しておりました。今になってもどれが大もとだかわからないものもあるぐらいです。そういうような小説を祖母に読んでもらいまして、その辺から祖父にとっての文学への憧れができたのではないかと、本人自身もそう



語っております。

そんな中で、大学では経済を専攻していたようですけれども、なぜ経済に興味があったのか、本人も書き残しておりますが、経済の実体を作り上げるものは欲望であり、その欲望の姿を浮かび上がらせるもの、一番根底には人間の心理があると言っております。非常に心理に興味があったようで、このあとの時代にも心理学関係の本をたくさん読んだり調べたりしております。フロイトの時代ですので、心理学というのが世間でも流行った時期でもあろうかと思えます。

大学を出てフリーターをやっていたわけですが、その中でどうしても小説を書きたいという気持ちが強かったようです。大学時代に図書館で海外の小説に触れまして、そのころの海外の小説といいますと「アルセーヌ・ルパン」ももちろんありますし、「シャーロック・ホームズ」もありますし、「ギルバート・キース・チェスタトン」もいた時代なんですけれども、そういうものを読んで、そういうものを書きたいと思っていました。というのも、祖父は英語の読み書きができました。ほとんどしゃべれなかったようですけれども、読むのには不自由がなかったようです。そういう憧れのもと、フリーターの時代に作品を書いては送りをしていましたが、なかなかものにはならなかったようです。

結婚をして私の父が生まれた前後ですが、会心の作ができたので、その当時有名だった評論家の方に原稿を送ったそうです。ちょっとご注意いただきたいのが、今でしたら原稿を書いてコピーを取るなどして手元に控えが残りますが、そのころはワンオフです。万年筆で書いたりして、下書きはあるにしても本物は1枚しかありませんので、送ってしまえば手元には残りません。梨のつぶてで当然で、素人が原稿を送ってきても評論家は読んでいる場合ではないのですが、ひと月経っても返事が来ないと怒るわけです。祖父は2通目の手紙を出しまして「まだ読んでいないなら返せ」と書いたんですね。確かに手元にオリジナルがないのでその気持ちもわからなくはないのですが、私とその立場なら無礼だろうなどと思ってしまいます。

それでもちゃんと返ってまいりまして、今度は、そのころ出版が始まりました雑誌「新青年」に送ったそうです。「新青年」という雑誌は、もともとは海外雄飛を目指す青年向けの雑誌というスタートだったようですが、そのころちょうど森下雨村さんという編集者に代わられて「そんな内容では売れない。もっと面白い雑誌にしよう。」といろんな小説を載せるようになってきていたようです。その時期に原稿を送りまして、めでたく採用されたのが1923年（大正12年）のデビューということになります。この小説は「二銭銅貨」という小説で、今の人は誰も知らないと思いますが、二銭銅貨というのは4cmくらいあるかなり大きい硬貨だったようで、このストーリーは二銭銅貨が蓋物になっていて、中に暗号が入っているというところから始まるんですけれども、この暗号のネタがなかなか面白くて、お経と点字を組み合わせたユニークで日本的な暗号の作り方で話題になりまして、非常に売れたということです。その時、すでに3つ目まで書いていたようで、注文もどんどんくるようになりました。

しかし、祖父はビジネスマン的な面がありました。フリーターをやっていたんですが、結婚をして経済的に大変になりましたので、フリーターをやっている場合じゃないと思い、同じ年に大阪毎日新聞社の広告部に就職していたそうです。この広告集稿が実にうまくいったようで、連合広告（皆さんの名刺などいろいろな名前を1ページに入れて割り勘で払う）

を考えたのもどうも祖父のようです。給料が歩合制で、営業成績が良く、給料が上がり始めたころに作家としても売れ始めたという裏腹なこともあり、生活を考えればここにずっといたほうが良かったのかもしれませんが、若い時からの夢が捨てられないということで、専業作家になり、上京し、デビュー3年目にして人気作家の地位を獲得しました。

推理小説というのはタネがあるんですけども、4、5年書いているとタネが尽きてくるんですね。最初の頃は書き溜めたものがあるので何とかなっていたようですが、だんだんアイデアの欠乏に悩むようになり、けれど何とか書きたいという葛藤の中で、注文がくるけれども書けない状態が辛くなってきていたようです。

そんな時期が昭和の初めの頃なんですね。まだうちの父が3歳か4歳くらいになろうかというころだと思います。ちょうどその時、人気作家になっていたものですから、出版社から「全集を出してやる」という話がきまして、全集を出していただいたんですね。その全集を出すにあたっては、本人が広告媒体を作ったり、今でいう店頭のポップみたいなものを作ったりと、変な才能を持っていたものですから一生懸命営業に協力をして、全集はかなり売れました。

そのお金を元手に、早稲田に「筑陽館」という下宿屋（食事付きのアパート）を買い取って、安定収入をはかりました。翌年にはこれを売却して、さらに大きい「緑館」を購入し、妻に経営を任せて、タネ切れとなった本人はタネを仕込むため、休筆宣言をして3ヶ月～半年ほど日本海沿岸などへ放浪の旅に出てしまいました。

それまでは、二銭銅貨の流れで論理的なストーリーのある小説を書きたいということで書いていたのですが、それだと短編になってしまいますので連載が大変なんです。祖父は特に短編が得意だったということもあるんですが、雑誌からは1年間お客様をつなぎとめる連載が欲しいという要求が強くなってまいりました。もともと祖父にはいろんな趣味がありまして、男色と言われるゲイの世界も好きですし、今でいうグロテスクなことも好きですし、いろんな不思議な志向を持っておりましたので、その辺を発揮して、1930～32年に長編小説を書いたらそれがばかうけしてしまったんです。確かにその当時の世間の常識からすると、ギリギリトークを書いていたというところがあるのかもしれないのですが、非常にこれが売れました。けれども、自分が書きたいものではないとストレスが溜まっていて、1932年には2度目の休筆。有為転変の激しい作家生活を送っていたようです。

そんなことがあって昭和の一桁を過ごしていたのですが、だんだん世間がきな臭くなってきて、その中で自分に対する風当たりも若干感じていたんだと思います。ご時世柄、人を殺すなんていう、盗賊や悪者が主役なんてあり得ないという時代の中で、昭和10年ごろに、そのころのメガマガジン「少年倶楽部」（講談社が出している、子供向けが「少年倶楽部」、大人向けが「キング」という雑誌）からご注文をいただいたそうです。いろいろ考えたらしいですが、「子供向けだったら楽に書けるかな」というのが最初の動機だったようです。いろいろシリーズで出ていますが、中には完全に自分の作品の焼き直しもありますし、海外の小説の翻案に近いものもあります。ただ祖父は文章が上手いので、子供でも楽しく読めるというところがうけたんだと思います。「少年探偵団」シリーズは昭和10年代に大ブレイクをしました。今でもそうだと思いますが、1年間の連載をして、連載が終わるとすぐに単行本が出るというサイクルを続け、これは非常に大成功しまして、祖父

も非常に気を良くして一生懸命書いていたようです。

ところが、だんだん時代のきな臭さが度を強めてまいりまして、江戸川乱歩という名前は世界で最初にミステリーを書いたとされるイギリス生まれのアメリカ人「エドガー・アラン・ポー」という名前をもじったものですから、横文字をもじった名前をつけるとは何事だ、とか、謂れのない謗りを受けるようになってきました。1939年に出版された「芋虫」が、反戦的ということで全編削除の命令を受けまして、発禁になったのはこの短編小説1つだけだったにもかかわらず、日本の良くないところなんです、出版社が皆自粛してしまっただけで注文が来なくなってしまい、1941年の時点で旧作はすべて絶版となってしまいました。生活のために筆名を「小松龍之介」に変えていくつか書いてはいたのですが、それも注文が来なくなってしまい暇になってしまいました。

暇になると、もともとのビジネスマン的な几帳面で整理好きの部分が急に発揮されまして、執筆できなくなった時間を自らの資料整理に当てました。それまで46回引っ越しをしているのですが、中学時代からの諸々の自分の記録を全部引っ張って歩いていたんですね。普通は要らない物は整理するんですが、メモみたいなものも全部残っていました。それをスクラップブックにまとめまして、細かい解説を自分でつけて貼雑年譜の製作を開始しました。祖父は日本の推理小説の開祖だと言われておりますので、ここに書いてある詳細な記録が日本のミステリー史になるんです。書いているのは江戸川乱歩本人で、本人以外書いておりませんので反証の仕様が無いのですが、書いてあることが本当か嘘かわからないけれどもこれしか資料がないという時期が長いので、今の研究者の方が読んでいるところもあるのかもしれませんが、極めて綿密な資料です。

世の中で疎まれているとはいえ、祖父は有名人なものですから、地元では池袋北町会副会長などをやらされまして、雑誌の取材を受けたりもしていました。防空訓練ですとか配給の時に混乱を起こさない方法や、町会費の徴収の仕方などのメモが今でも残っています。いよいよ困りまして、1945年、福島県の保原というところに疎開することになりました。実は4月に城北大空襲というのがありまして、その時に家族は疎開していたのですが、乱歩は疎開をしておらず、ただ幸いなことに家は焼け残りしました。40代後半のころ、食料公社に履歴書を出して求職活動をしています。この日付が7月、終戦ギリギリの頃ですが、8月17日、終戦の翌々日の日付で「仕事は普通にできるから履歴書はなかったことにしてくれ」という文面の手紙が残っています。作家として出版活動を再開できたことが嬉しかったんでしょうね。こちらはうちには当然残っていませんので、履歴書を送った宮城県の白石の横山さんのご遺族の方が保管していたのを送り返してくださったものです。時代の厳しさというか、激変というものを感じさせるものかなと思います。

終戦直後、こういうことがあったのですが、旧作が非常に売れました。これは全然違う話で、ジュンク堂書店という大手チェーンであります、そちらの社長の工藤さんという方にお話を聞いたのですが、阪神淡路大震災の後、いち早く店を開店したんだそうです。その時はばかみたいに本が売れたそうです。やっぱり、そういう大きな事件があった後は、紙の書物に飢えているのかな、今はネットがあるから違うのかもしれませんが、そういうこともあるのかもしれませんが。終戦直後、本当に祖父の本はたくさん売れたそうです。あのころですから、カストリ雑誌だとか、綴じられていても仙花紙みたいなひどい紙なんですけれども、そういうものをたくさん出していただいて、突然ここでお金持ちになっちゃ

うんです。一度栄養失調になりかかっていますので、体は痩せていて情けない姿をしているのですが。

ただ、戦後はあまり小説を書いておりません。ミステリー（探偵小説）という、自分がやってきたジャンルを世界に認めさせるということを目指して活動しました。海外作品の収集に熱中し、評論活動や海外作品の紹介、新人作家の発掘、探偵小説作家の地位向上などに力を入れておりました。また、戦争の記憶があったからかもしれませんが、文学の普遍性ということに気がかけておりました、これは実はローマ字運動なんですね。ローマ字で書けば日本語の壁が一つは減るだろうというのが彼の意見だったようです。今は全く下火になっていますけれども、昭和 20 年代はローマ字運動が盛んだったようです。あとはエスペラント語という世界共通語という理念で始まった言葉があるのですが、自分の小説のエスペラント語の翻訳も 1 つだけあります。エスペラント語を読める人が読んでみたら、全部は出来ていなかったようなのですが、そういうものもあります。それから点字訳にも協力しております。

昭和 34 年（1959 年）、東京池袋ロータリークラブができました。その時の創立会長が、立教大学の総長だった松下正寿さん、のちに都知事選に出ましたのでご記憶の方もいるかもしれませんが、たまたま家の真ん前の学校でしたので誘われまして、この時チャーターメンバーで入会をしました。チャーターナイトは立教大学の教室で行われ、パーティーは立教大学の学食で、極めて質素に行われていたようです。名簿ですとか、本人がチャーターナイトにご招待をした手紙が残されております。こういったものが貼ってあるということは、本人も非常に嬉しかったんだろうと思います。それも職業「作家」で入ったことが特に嬉しかったのかな、と思っています。メンバーには堤清二さんや上原正吉さんもいらっしゃり、あの頃のロータリーは本当に凄かったんだなと思います。祖父は父に「ロータリーは金がかかるぞ」と言い残していたそうで、父はロータリーのことは良く知っていましたが、本人はどうとう一度も入ろうとはしませんでした。

人嫌いだった祖父は戦中の経験から急速に社交的になり、ジャンルの確立のために「探偵作家クラブ」（現在の「日本推理作家協会」の前身）を設立し、日本の推理小説界の発展に貢献しました。

ということで、孫から見た、はす目から見たようなヒストリーで申し訳なかったんですけども、皆様のご記憶に少しでも残るような話が出来たら良かったかなと思っています。

本日はご清聴ありがとうございました。



■江戸川乱歩 作品

「二銭銅貨」「陰獣」「一寸法師」「孤島の鬼」「蜘蛛男」「怪人二十面相」「芋虫」
 「江戸川乱歩全集」全13巻、「江戸川乱歩選集」全10巻 など
 筆名 小松龍之介として「知恵の一太郎ものがたり」

◇ 謝 辞 成田 温 会長

平井さん、どうもありがとうございました。江戸川乱歩がロータリアンであったことやビジネスマン的才能がかなりあったということなど全然知りませんでした。また、家にある古い本を引っ張り出して読んでみようかなという気持ちになりましたので、本日は誠にありがとうございました。

◇ 点 鐘 成田 温 会長

出席表

会員数	出席義務者数	出席数	欠席数	出席率	前回補正
74	71	49	22	57.75%	57.75%

MAKE UP CARD

氏 名	月 日	ク ラ ブ 名
松田 泰長 会員	9月9日	地区委員長会議
諸岡 市郎左衛門 会員	9月13日	成田コスモス リタロータークラブ
松田 泰長 会員	9月13日	第3分区B情報研究会
諸岡 靖彦 会員	9月15日	第3分区Aローター情報研究会
諸岡 靖彦 会員	9月18日	地区ローター青少年交換委員会
松田 泰長 会員	9月19日	第10分区情報研究会
諸岡 靖彦 会員	9月20日	印西ロータークラブ 臨時理事会
諸岡 靖彦 会員	9月20日	成田コスモス リタロータークラブ
諸岡 靖彦、長原 正夫、平山 秀樹 各会員	9月21日	第9分区会長、幹事会
諸岡靖彦、堀口路加、成田温、神崎誠、吉田稔、石川憲弘、 長原正夫、平山秀樹、深堀伸之、設楽正行、石橋菊太郎、 松田泰長、佐瀬和年、諸岡市郎左衛門、小宮山四郎、 豊田磐、香取竜也、齊藤三智夫、永井秀和、渡邊孝、 近藤博貴 各会員	9月22日	第1回 諸岡ガバナ一年度 準備室会議
諸岡 靖彦、堀口 路加 各会員	9月25日	地区戦略計画委員会

事務局 〒286-0127 成田市小菅 700
 成田ビューホテル内
 電話/FAX 0476-33-8786

例会場 成田ビューホテル
 電話 0476-32-1111
 例会日 金曜日 12:30
 例会出欠連絡先(直通)
 電話 0476-32-1192 FAX 0476-32-1078